

## 本は積まれて価値を増す

豊橋図書館長 山田 邦明



就職が決まってアパートを捜したとき、まず考えたのは、本の重みで床が抜けたりしない、丈夫なところを選ぼうということだった。東京の下町に格安の物件をみつけて引っ越したが、大家さんも運ばれた段ボールの量に驚いて、近所でも評判になった。食堂で前に座った人から、なんで本を捨てないのかと聞かれて、「商売道具なのでしょうがないんです」と答えたら、「商売道具っていう言い方、なかなかいいねえ」と言われた。

あれから30年、本はひたすら増え続けた。置き場がなくてたいへんだったが、愛大に赴任して個室の研究室をいただいたことでなんとか解決した。かなりの量の本が書棚に並べられて、基本的な仕事は研究室の中でできるようになったが、本に囲まれて仕事をしながらふと気づいた。本というのは、少しばかり並んでいてもたいした価値はないけれども、ある程度の「かさ」になると、俄然輝きを増すのではないか。研究者にとって本はものを調べるための「商売道具」で、必要なときに近くに存在することがとても大切なのだ。

愛大図書館の蔵書の多さにはほんとうに驚かされる。自分もちろん利用させてもらっているが、学生たちがゼミの発表をしたり、卒論をまとめたりするとき、図書館に行けば関係する書物を手にできるというのがなによりありがたい。これだけの蔵書を集めてこられた方々の見識と努力にはほんとうに頭が下がる。

すぐそばに必要な本があることの意味ははかりしれない。予算やスペースの問題など、難しいこともあるだろうが、やはり本は多いほうがいいという原点を大切にしたいと思う。

